

論文審査の結果の要旨

H25年4月8日(月)16時から全員出席のもと、落合康利先生の学位審査を行った。申請論文は「表層性胃腫瘍284例352病変に対する内視鏡的粘膜下層剥離術」である。審査に先立ち、本論文がThesis論文であることが確認され、申請者からの発表が約20分行われ次に質疑応答をおこなった。

近年、治療内視鏡の一つである内視鏡的粘膜下層剥離術(endoscopic submucosal dissection : ESD)の進歩が著しいが、本論文は表層性胃腫瘍に対するESDの短期及び長期治療成績を高齢者と非高齢者で比較検討したものである。

埼玉医大国際医療センターにて2007年から2010年までにESDを施行した表層性胃腫瘍284例が対象で、65歳未満を非高齢者群(72人)、65歳以上を高齢者群(212人)とし安全性、効果、治療成績等が検討された。

平均切除検体径、平均腫瘍径、一括切除率、平均手術時間は2群間で明らかな差は認めず、穿孔は計3例に生じたが全症例においてクリップ縫縮で改善し、他の主な治療偶発症もしくは原病による死亡、局所再発および遠隔転移再発はいずれの症例においても認めなかった。これらのことより、表層性胃腫瘍に対するESDは年齢を問わず安全に施行でき、その治療は効果的であることが示された。

主な質問は以下のようであった。

- (1)65歳で高齢者、非高齢者を分けた理由はなにか。より高齢者における成績はどうか。
- (2)穿孔率が低い(0.85%)、手技の工夫や他施設との比較はどうか。
- (3)全身麻酔下での処置例はどのように決定したか。
- (4)申請者本人の施行例の割合はどの程度か。

これらの質問に対する申請者の返答は以下のようであった。

今回の研究では高齢者の定義を世界保健機構(WHO)の定義に従い、65歳以上を高齢者群としたこと、より高齢者(80歳以上等)における治療成績、偶発症も明らかな差は認めなかったことが示された。穿孔率は他施設と比較しても低く、複数の術者で施行されているが手技の安定性が確保されているものと推測された。全身麻酔例は概ね施行時間が2時間を超えると予想される例に行われた。申請者本人の施行率は約1/3とのことであった。また、委員から論文中の表、図の説明分の追加の要望があり、後日主査が確認することとした。

申請者の態度、人格も良好と判断され質問に対しても適切な返答であった。

近年、胃癌のなかで早期癌の増加が顕著であり、さらに高齢者の胃癌に遭遇する機会も多い。このため早期胃癌の治療方法の選択が重要であり、外科手術では腹腔鏡下手術が発展しているが、低侵襲治療であるESDの利点や必要性は今後さらに高まると考えられ、治療成績などを含めて本論文は高く評価できるものと思われた。

よって本委員会は、本論文が学位論文として適格と判定する。